

ラテンアメリカにおける現代芸術の特徴

周 欣 越

要旨

国際芸術における燦爛なラテンアメリカ現代芸術（以下、ラテン現代芸術と略す）が注目されている。本研究はラテン芸術の特徴について考察を行っている。この特徴は民族性、魔法性、政治性、現代主義という四つ特徴を備えている。本研究では、ラテン芸術が欧米芸術を吸収しながら、本民族性を保持し、即ち、人本主義と民族主義に基づき発展してきたものを考察する。加えてラテン現代芸術の研究の現実主義とその課題を明らかにする。

キーワード：ラテンアメリカ芸術；現代芸術；本土性；魔法主義；現実主義

1. はじめに

長期にわたって欧米文化を主流とすることに対して、ラテン現代芸術は異属文化の冠たるものであり、欧米現代芸術の模倣品あるいは、二流芸術とも称されている。しかし、ラテン芸術品が、国際オークション市場や国際的展覧会において好評価されるようになってきた。そして、ラテンアメリカでは原始文明と多元文化を保有し、数百年の植民地の歴史を有する大陸である。国際芸術文化の多元化に従って、ラテン現代芸術の真実とその重要性が改めて探究されつつある。

特に、ラテン現代芸術は生命と大地に対して無限の愛を顕示している。さらに、多言文化の内面的衝突によって、ラテン現代芸術がその旺盛な生命力と幻想力を有し、現実的、心霊的、忠实的、マジック的な表現力も顕している。

ラテンアメリカにおける歴史と文化、特に古代から現代に至る芸術品を観察すると、その強い民族色、顕著な特徴、深遠な意味が見つけられる。地理的、文化的な側面によって、ラテ

ンアメリカの芸術家の作品は本質的に類似の芸術的特徴を持っており、時間を経過しても国及び地域を分けても、その特徴はアーティストらの作品から見る事ができる。従って、これらの特徴は他の文化と芸術に異なっているがゆえに、その芸術による魅力が人々に感動を与えている。

2. ラテン現代芸術の特徴

2.1 ネイティブ性

ラテンアメリカでは多くのアーティストの作品がネイティブ性 (Nativists) をもって、これらは本土文化のテーマを描いているため、ラテン現代芸術の重要な特質を形成している。このネイティブ性はオリジナルの地味と強烈な地域性を保持しているところから、先住民族文化とも呼ばれている。

ラテンアメリカの歴史を遡ると、高度に発達してきた古代インディアンの文明、貴重な芸術と文化遺跡、金色の太陽の崇拝、そして政治的信念に興味を持つアーティストが存在している

ため、ラテン現代芸術は独特な民族色彩を持っていると考える。

ラテン現代芸術の作品については、その造型が原始主義的な、単純な輪廓であり、その主題が主に生命のサイクル、女性（母性）、大地等に関するものが多く、その色彩が赤褐色化する傾向がある。メキシコの著名な彫刻家であるフロシスカ（Francisco Zuniga）の作品の多くは、庶民派のインディアンの婦人である。彼女達の顔面とその表情から辛抱な生活を表し、疲れ果てたボディが社会下層の労働婦人の生活、精神とその尊厳を映している。それ故、ラテン現代芸術におけるネイティブ性については、以下の成因が考えられる。

(1) 古代インディアン文化がラテン現代芸術家へ深刻な影響を及ぼした。ラテンアメリカのインディアン文化には三つの文明があると言われている。即ち、マヤ文明、アジトコ文明及びインカ文明である。その内、マヤ文明が最も発達していた。ラテンアメリカの先住民族は極めて燦爛な文化を創り、広大な神殿と繁栄の町、精美な彫刻と建築をも造った。そして、今までの考古学さえ難解とされている文字や、多くの神秘的な遺跡を残している。これらは今日の芸術家が見ても驚くばかりであり、かなり巨大な影響を及ぼさざるを得ない。

マヤの壁画及び彫刻の作品における顕著な特徴は、その描かれた人物の額と鼻が一直線になっていることにある。この人物の表現方法は、現代ラテンアメリカ芸術家の作品によく見られる。例えば、リウエラ(Django Rivera)の「トトナコ文明」におけるすべての人物画像は、額と鼻とが一直線となっていた。それに、彼の画像を見れば、額がちょっと狭く、後ろに傾斜していると感じている。この手法は画面の原始的、先住民族風が強化されている。

また、メキシコの著名な抽象派の彫刻家であるサイワスティアン（Sebastian）が造った巨大で、抽象的な幾何彫刻は、強烈な時代風格と精密な数学思惟及び深い芸術素質を著している。彼の作品「平和の門」は、2002年に北京で開催さ

れた国際都市彫刻芸術展において好評を博した。彼の多くの作品は、インディアンの彫刻から靈感を取り入れたことであると本人が率直に述べており、彼の「オオルメコの大頭」と「トルトコ武士」がそのことの証左となっている。

(2) 18世紀末から19世紀の初頭、ラテンアメリカで大規模な民族独立運動が起こった。いわゆるスペイン等の国々に数百年に及んで植民地支配された国々は抵抗する運動を爆発させた。それらの運動が勝利を収め、多くの国家が独立した。それによって、ラテンアメリカ文化の発展が飛躍的に推進した。20世紀の初め、メキシコではブルジョア民主革命運動を開始し、リウエラをはじめとするメキシコの青年画家が、自由のための闘争を押し進めるため大規模な壁画運動を展開した。この運動はメキシコの文芸復興と呼ばれている。この画家達は新興国家の政治的理念と思想を表現すると同時に、壁画という極大な宣伝性と公共性を有する媒体を使い、14世紀のアジトコ人における伝統的な壁画芸術の復興を図ってきたのである。従って、メキシコの壁画運動は、ラテン現代芸術における民族文化と、その芸術風格に対する推進と発展を巨大な影響を及ぼしたといえよう。

(3) ラテンアメリカの多くの芸術家は、自分の国と民族に対して非常に強烈な帰属感と民族自尊心を持っている。そのため、各自の作品においては強烈な民族色彩を持っていることと自讃している。この多くの芸術家は欧米に留学の経験を持ち、母国を離れた日々に自国の文化の優れたものを実感していた。それに帰国後にも自分の民族芸術の特質を描き、発掘することに努めてきた。メキシコの四人の女傑の一人であるイスキヤド(Maria Izquierdo)は、「私の絵に自分の感受と深く愛する真実なメキシコを反映することに尽くしている」という言葉を残している^[1]。更に、ある画家の作品において、強烈な欧米の現代芸術色彩を持っていることが、批判されるようになっていく。

(4) 地域性がラテンアメリカの文化が他の国及び民族と断然に異なることをもたらした。例

えば、熱帯森林、砂漠、サボテン、トウモロコシ、サンシャイン、及び先住民が着ている鮮やかな民族服装のインディアンの末裔が、いずれも原始的シンボルとして、芸術家達の作品においても独特なラテンアメリカを連想させた。

2.2 魔法性

北米では魔法芸術をラテン現代芸術と呼ばれている。これに対して、ラテンアメリカの人々が北米の傲慢さで言葉の濫用に過ぎないと考えているにもかかわらず、ラテン現代芸術家らは魔法の表現技法をそのまま受け入れて、さらに広がってきた。魔法性というのは、表現内容がファンタジーに溢れ、そのアイデアが民俗芸術と原始美術を神秘的色彩で、奇妙に誇張された手法のことである。20世紀に入って1920年代に欧州の超現実主義派画家であるブレイトン (Andre Breton) は、メキシコ画家の作品を見た後で、「メキシコは天然の超現実主義の国である」と感嘆した^[2]。魔法主義の傾向は多くのラテンの画家の作品にしばしばみられている。その中で、女性画家の表現技法に顕著にみられる。たとえ、誇張された比例、錯乱の空間、半植物半人間、あるいは半野獣半人間の結合体、または果物とスカルというような矛盾の物の並列、非現実の景勝等がある。ラテンアメリカの美術作品に魔法的特徴がみられる原因は、以下のように考えられる。

(1) ラテンの魔法意識が生活と文化に根ざしたものである。古代のインディアン文化には多くの神話物語や伝説がある。さらに、その物語と伝説が自然現象と日常生活に有することを解釈する根拠となっている。ラテンアメリカの芸術家は古代の神話と伝説を背景にして、彼らの作品に再現し、さらなる魔法色彩になってきたのである。メキシコの著名な画家であるフリーダ・カーロ (Frida Kahlo) は、古代インディアン文明の中のアジトコ人が、尊敬されている大地女神をもとにして生育主題を描いた。また、彼は園芸家ラセル・バンコの肖像には半樹半人の構想で完成した。この構想はインディアン

宗教の万物一体という伝統思想に基づいたものである。彼の作品は魔法性の手法を通して、受傷、沈黙、堅忍の内心情緒を神秘的で詩的な解釈と、コールドなプロファイリングで完成したものである。

それに、古代芸術には神秘性もラテン現代芸術の特徴になっているのである。古代芸術作品には獣首人身の画像や、神秘的色彩の図形と人物画像がよくみられる。マヤ文化の中にトルムの壁画と、ウスマル大統領宮殿の符号化する浮ぶ彫刻が、「驚かせる宇宙」技術を有するようにしたものである。このような文明はさらに神秘性を深め、想像を広げるものになっている。アジトコ文明には濃厚な宗教性があり、その宗教儀式が神秘的、かつ恐怖感がみられる。例えば、残酷な人祭りは、タシナ・ヤマルイの「食人族」が当該文化を引き受けたものである。これら古老の本土文化は、ラテンアメリカの芸術作品における魔法技法に大きな影響を与える。

(2) スペイン文化とラテンアメリカ文化との衝突と融合がみられる。1942年コロンブスの艦隊は大西洋を渡って、アメリカ大陸のバハマ群島に来てから、ラテン諸国の300年以上のスペインの植民地支配を始めた。スペインの植民地時代の支配者は、厳格なポリシーをもって、ラテンアメリカの民族的文化を強硬に置き換える施策を採択した。このプロセスでは、情熱的で伝説的なスペイン文化に融合したため、ラテンアメリカという本土の文化を徐々に情熱的で非現実的な芸術を形成することとなった。

(3) ラテンアメリカの不安定、独裁の社会環境によって、芸術家の創作の過程でよく隠喩の手法を使っていた。特に植民地支配された下で、ラテンアメリカの芸術家達は各自の社会と政治に対する考えを訴える為、自身の安全を考慮し、ついに象徴と比喩の方法で心の内なる声を唱えるのである。『ラテンアメリカの現代文化』の作家で文学史家であるジエン・フランゴ (Jean Franco) は、ラテンアメリカ文化は滑稽と魔法を知るために存在するものであるといい、滑稽は転覆の概念の一つであり、現実的法則を質

疑し、逃避するひとつでもあり、挑戦でもある。

(4) 超現実主義はラテン現代芸術魔法の特徴の一つ重要な影響要因である。ダーリをはじめとする超現実主義派画家はフロイドの精神分析原理に基づく潜在的意識を強調し、イリュージョンの色彩がある作品を創作した。この描き方はラテン芸術の表現方法に適合し、多くのラテンアメリカ芸術家に影響を与えた。但し、すべての魔法色彩がある作品を超現実主義派に帰納していることが点は適合ではない。

超現実主義派の大家であるブレイトンが、メキシコは超現実主義の発展が最も理想的な国家であると考えているが、多くのラテンアメリカの芸術家は超現実主義の分類に関する考え方が異なっている。それはまず、ラテンアメリカでは天然の超人の豊富な想像力を持っているためである。次に、外国の関与を回避するための民族主義の目的である。ラテンアメリカの魔法主義と超現実主義の作品を比較するとわかりやすい。前者は現実に対して誇張と解釈するものである。後者は夢想と潜在的意識を描ききったものである。即ち、超現実主義は主観的、観念論的なものであり、魔法主義は客観的、唯物論的なものである。「私が超現実主義派の画家であると言われていたが、実はそうではない。私は夢を描くものが一つもなく、全て真実を描いたのである。」と述べたフリーダの話は、両者との違いを説明することができる。

このように総じて、ラテン現代芸術作品の中の魔法色彩は芸術家のラテンアメリカの社会生活や政治生活を表現し参加するための真の創作する目的を表し、誇張や滑稽の表現手法である。

(5) ラテンアメリカの熱帯気候により、奇異の熱帯植物、砂漠、海洋等魔法が生成の温床になっている。ラテンアメリカの芸術家に対して、魔法表現手法は一つの非常に、自然的な傾向である。それは原始アイデアを魔法化するための自然過程であり、魔法アイディの構造を経て心霊の世界を強調し、当代の問題を魔法的な現実反映するものである。

2.3 政治性（批判的現実主義）

他の国の画家が芸術に専念することと違って、ラテン現代芸術は社会、国家、民族、政治信念に対する強烈な責任感と敏感度を持っている。メキシコの画家シキロス（David A Siqueiros）は、「芸術は個人的な表現を満足することだけでなく、多くの人々に芸術を啓示と教育するためになりうるものである」と述べている¹⁴⁾。

これは芸術のための芸術ではない観念が、欧米主流の芸術と対照的なものであることを表す。ラテンの公共芸術はこの思想をさらに強化したのである。その中、イタリアの文芸復興以来の最も偉大な民族壁画運動である「メキシコの壁画運動」は、その最も大きな影響によるものである。メキシコの現代壁画は実質的な社会機能を持っている革命的芸術、創造的芸術であり、美学の特質も深厚なものである。壁画家は大衆意識の表現を強調し、芸術自身が大衆交流に対する視覚的対話ツールであると考えられる。

リウエラの「革命闘士の血が大地を潤し」とホシ・オウロシコ（Jose Orozco）の『米国の文明』において記述されているのも、大衆意識の立場と傾向を再現しようとするからである。それ故、メキシコの壁画は壁画家の自己創作の意図を表現するものだけでなく、さらなる大衆との間に政治、文化、社会問題に関するコミュニケーションを図ろうとする架け橋であると考えられる。メキシコの壁画運動は革命、政治等理念を強烈的に表現するため、西側が主流とする現代芸術史から除外する。但し、メキシコ壁画運動は関心を寄せる民衆意識や、自由と正義のための抗争と努力することが再評価されるべきであり、壁画自身の表現したものが貴重なものであることも意識しないではいられない。

ラテンアメリカの芸術家は本国の時事政治を批判することや民衆の関心に添うと同時に、ひとつの共通の特典は外来文化に対し、特に米国文化の侵入と他の実質的な侵略に対する反抗と不満を示したものである。20世紀の1950～60年代に米国政府は地縁政治を安定させるため、ラ

テンの国家と地域に対して統制と侵略を強化した。当時はラテンアメリカの多くの才能がある青年芸術家は、「ハリウッドの映画を含む米帝国主義の文化と闘争しよう」、というスロカーンを提起した^[5]。

アルゼンチンの画家であるアンドンニオ・ボニ (Antonio Berni) の作品は鮮明な批判的な現実主義手法を取り入れたことによって、積極的なラテン批判現実主義の政治教皇と呼ばれた。彼の代表作である「ララグナ」は米国のタバコとコロンビアの麻薬がラテンの侵害を表現したものである。アルゼンチンのもう一人の画家であるルス・フェリプ(Luis Felips)の作品「希望の導く」は、米国の民主がラテンに希望を与えられないという考えを示したものである。

コロンビアのボトロ (Fernando Botero) 画家は駐イラク米軍の囚人虐待事件に極大な憤慨を表現するため、「監獄系列」の作品には囚人虐待事件の光景を再現し、民主主義を標榜する米国が他の国で罪を犯したことを暴露した。その後、これらの作品は2004年6月16日にローマのパラゾ・ヴェネジア (Palazzo Venezia museum) 博物館で出展し、国際与論の強烈な反響を呼んだ。それに、彼はラテンの政治形態にも非常に関心を持っている。「ラテンの世界を描こうと思い、風景と人物だけではなく、政治の動静も描いていこう」と声明した^[6]。

従って、ラテン芸術は社会現実、政治との関連が緊密になって、この特質がラテン芸術に強烈な現実主義を批判する風格と深刻な社会現実的意義を付与したものである。

2.4 ラテンの現代主義—欧州と自己の立場を同時に保持すること

20世紀のラテン文学が世界で影響を広げてきて、ラテン芸術が段々と主流芸術市場で注目されるようになった。1950年代、米国がラテン芸術家の作品の購入を始めることになってきて、それに関連の芸術家の出展を要請した。当時2000名余りのラテン芸術家が参加し、出展回数が750回以上に達した^[7]。1970年代ワシントン

でラテン現代芸術博物館が建てられ、ラテン現代芸術が疎外されている状態が段々に変わってきた。しかし、ラテンアメリカ国家は西側現代主義芸術に対して矛盾な態度を持っている。その一つは、本民族文化の復興に基づいて、ラテンアメリカ芸術家達が自己の独立的な芸術風格を保つためである。もう一つは、ラテンアメリカ学院派の保守と柔軟性が利かないことに反対するため、外来の文化と芸術からの衝突によって、ラテン現代芸術のイノベーションを望んでいるからである。

ラテンアメリカではほとんどの芸術家が欧米の留学経験を持っているので、彼らは現代主義との交流が頻繁になっているため、その関係は師弟の関係であり、友達の関係である。ラテンアメリカの多くの芸術家は帰国後本土芸術の現代化を志している。例えば、ブラジルの現代主義推進者タシラ・ヤマルイは1922年に「ブラジル現代芸術週」を開催した。タルイカシア (Torres Garcia) はコロンビアで「新芸術運動」の遂行と「構成主義芸術協会」を立ち上げ、自民族文化の復興とラテン現代美術及び「メキシコの壁画運動」の進展を図っている。この組織、運動及び芸術家の努力により、ラテン現代主義の発展が大きく推進することに役立った。

現代芸術はラテンの影響が深かったが、ラテンアメリカ芸術家の国際的先駆けの言葉で自民族の伝統的な主題に対する表現することについてあまり支障ない。これは欧州から離脱せず、自己の立場も喪失しない、つまり、欧州現代芸術とラテンアメリカ伝統的観念との間に平衡点を見つけて、さらなる新世紀文化の視覚言語を形成しつつある。

ラテンアメリカでは自己文化の帰属感という特質がある。すなわち、それは外来文化を吸収すると同時に、自分の特有の血^①を保つことである。メキシコの画家ルフェヌオ・タマユエ (Rufino Tamayo) がラテンアメリカ画家の色彩大家と呼ばれ、その描かれたの風格がマティスの影響を受け入れたとも言われている。彼はメキシコの特有な魔法主義と西欧の超現実

主義を結合して、新たな「具象シュールレアリズム」を形成した。前世紀年代にポープ芸術が大流行し、メキシコを經由してラテン諸国に伝播した。そして、ラテンアメリカ芸術家はこの芸術風格と形式を取り入れて、自分の思想と精神内観を注入し、そのうえ代表的な「ラテンポープあるいは新ポープ」を形成した。ピド・フェカリ (Pedro Figari) は高度な個人風格の表面上、表現主義に接近したものである。実はその表現はブラジルの現代精神に過ぎないといえる。

このように総じて、ラテンアメリカは他の地域と文化、政治の多元化によって、ラテンアメリカの現代主義芸術が心靈の側面に偏り、ユートピア信念の実践過程と考えられる⁸⁾。

3. ラテンアメリカ現代芸術の研究意義とその課題

ラテン現代芸術を全体的に見れば、これは欧米を主流としている芸術との距離があるが、その独自性、深い思想内観は疑う余地がない。ラテン現代芸術の芸術上の価値とその現代的貴重性は、我々が研究し、学ぶべきものが大である。これは芸術形式の多元化とそのイノベーションに刺激を与えることであり、それに芸術風格の更なる発展にチャンスを提供するためである。

ここで、最も重要なことはラテン現代芸術が西欧と北米芸術文化の影響を受けているとはいえ、ずっと自民族性とネイティブ性の特徴を保つことが称賛に値する。伝統芸術と文化を高揚すると同時に、ラテン現代芸術の独自の風格と鮮明な特徴を保有するために、芸術創作の形式と手法をさらに改善し、発展させていくことである。

ラテン現代芸術の今後に期待する課題は、まず自己の独自性を失わないと同時に国際芸術の軌道に乗り、継続的に発展させていくこと。次に、ネイティブ性を強調しすぎると疎外されることになることを避けること。これは現在の中国芸術の発展にも参考とすべきことである。

最後に、ラテン現代芸術における批判的な現実主義について、本国及び他国における民主、民生、覇権主義、衰退の文化等の諸問題を取り入れた上で暴露したことは、芸術の社会及び道徳の機能を十分に果たしていることの証明である。

おわりに

現在では、国際芸術の流派が多岐に分れているので、百家争鳴で様々な新たな芸術形式と表現手法は雨後の筍のように出てきた。新しく変化することが求められるが、ラテン現代芸術は大地、人民、自己文化に対する真摯な情熱を追求することを保持しつつある。これは人本主義と民族主義に基づくため、ラテン現代芸術が独自にかつ魅力を得たものである。それに経済的な効果をも取めたと理解される。2006年ラテン現代芸術と文化産業が国際上において大きな業績を取得したことが、世界で注目を浴びている。ラテン現代芸術は世界芸術の構成モデルを変形しただけではなく、その芸術を表現する諸特性が世界現代芸術において一曲の華美な、かつシンプルな楽章を書き加えたことに違いないと考える。

注

- [1] 啸声, 西游谈艺录寻梦墨西哥 [M], 河南人民出版社, 2003. (8):128.
- [2] 李建群, 20 世纪拉美美术发展特点 [J], 美术观察, 2001. (1):73.
- [3] 李建群, 拉丁美洲美术中的魔幻主义绘画 [J], 艺术生活, 2008. (1):7E.
- [4] 曾长生, 拉丁美洲现代艺术, [M], 艺术家出版社, 1997:137
- [5] 鲍玉珩, 20 世纪上半叶拉丁美洲美术概述 [J], 美术观察, 2008. (6):121.
- [6] 张南峰, 浓郁的热带丛林风情艺术 [J], 美术作品欣赏, 1999. (5):123.
- [7] 安赫尔乌尔塔多, 华盛顿市现代拉丁美洲艺术博物馆 [J], 世界美术, 1987. (12):63.
- [8] 曾长生, 拉丁美洲现代艺术, [M], 艺术家出版社, 1997:26